

共感性と骨髄提供想定相手との関係性が  
援助行動に及ぼす影響

The influences of sympathy and relationship  
with a donor on helping behavior

永井 菖乃, 西村 太志

NAGAI Ayano, NISHIMURA Takashi

広島国際大学 心理学部紀要 第3巻 抜刷  
The Bulletin of Faculty of Psychology, Hiroshima International University Volume 3  
2015  
広島国際大学  
Hiroshima International University

## 共感性と骨髄提供想定相手との関係性が

### 援助行動に及ぼす影響

広島国際大学大学院心理科学研究科 永井菖乃

広島国際大学心理学部心理学科 西村太志

#### 要旨

本研究は、援助行動に及ぼす共感性と援助対象者との関係性の効果について検討を行った。援助対象者が明示されていない場合（後悔なし条件）、共感性による骨髄バンク登録意識の高低による差は認められなかった。一方、援助対象者が明示された2条件（他人条件・友人条件）では、骨髄バンク登録意識の高低による差が認められた。そのため共感性は、他者の存在を明確に認識することによって援助行動の規定因となると推測された。また共感性の低い人々は、援助対象者との関係性や時間という心理的距離が遠いほど援助行動が抑制される傾向にあることが示唆された。

#### はじめに

白血病などの血液疾患では、その治療法として骨髄移植という手法が多く採用される。移植を行うためには提供者の存在が必要不可欠である。全身の細胞や体液には、HLA（Human Leucocyte Antigen=ヒト白血球抗原）といわれる型があり、体の組織や細胞など自己と非自己を識別することに関与する。臓器・骨髄移植を行う場合 HLA が適合する人物を探す必要があるが、近親者と HLA の型が適合する確率は決して高くなく、最も高確率の兄弟姉妹間でも 25%の適合率である。近親者に HLA 適合者が存在しなかった場合、数百から数万分の 1 の確率でしか一致しないとされている非血縁者による骨髄提供を求めるほかない。そのような患者に HLA の型が適合するドナーを探す役割を、公益財団法人日本骨髄バンク（以下骨髄バンク）が担っている。最近の我が国における骨髄バンク登録者数は 455,799 人（平成 27 年 10 月末現在）であり（日本骨髄バンク, 2015b）、登録者数は年々増加傾向にある。一方、骨髄バンクに非血縁者間移植を希望している患者は累計で 46,342 人に上る。非血縁者間移植を希望している患者の中で、HLA の型が適合した患者数は累計で 37,169 人であり、約 80%の人がドナーを見つけることが出来ている。ドナーが見つかった後実際に移植を行った人は 18,696 人（累計）であり、約 50%が骨髄バンクを通じて骨髄移植が可能となった。このように適合数と比べて実際に移植が行われる割合は少ない。移植が実施されない理由は様々であり一概にはいえないが、非血縁者移植希望患者が骨髄移植にいたる可能性を高めるためには、骨髄バンク登録者数を増やすことが求められている。そのために、骨髄バンクを中心に多くの広報活動が行われている。

骨髄ドナー登録の意義を強調した広報活動を行うことは登録数を増やすための一つの方略であり、多くの団体がそれに取り組んでいる。しかしながら、登録時の心身のコストの高さから検討しても登録に至らなかったり、最初から関心を持たなかったりする人々も多く存在する。これらの意

義を伝え登録を促すことは、説得技法を用いた態度変容の一形態と考えることができる。そこで本研究では、これまで社会心理学分野で主に行われてきた援助行動研究の視点から、個人の共感性と他者との関係性に注目し、ドナー登録への態度変容についての検討を行う。援助行動は、他者の状態やウェルビーイングを改善する、一人または複数の人間の行動であり、向社会的行動の一類型のことである。多くの援助行動が基本的に個人のリスクのあまりない小さな要求への反応であるにも関わらず、全ての援助行動はそれを提供する個人のコストを伴うと APA 心理学事典 (VandenBos (Eds), 2007) では定義されている。

### 援助行動と共感性

援助行動を促進する要因として、共感性概念に焦点をあてた研究が多く行われている。Davis (1994) は共感性を「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と定義し、認知的側面と感情的側面といった複数の側面から構成される多次元的概念として扱っている。登張 (2003) は、青年期全般を通して共感性の発達を検討できる多次元の共感性尺度を作成し、共感性と向社会的行動には正の相関関係があることを示した。また鈴木 (1992) は、共感性と向社会的行動の関連性に着目した。この研究では、向社会的行動の中でもリスクの高くない日常における「思いやり行動」に焦点をあて、共感性と社会的スキル、外向性に注目し、各要因がどのように向社会的行動に影響するのか検討した。その結果、共感性と外向性は向社会的行動に強い正の影響を与えており、社会的スキルは向社会的行動にほとんど影響を与えていないことが示された。援助行動は向社会的行動の一類型であり、援助行動においても同様の結果が生じると予想され、共感性の高い人は、援助行動全般を行う傾向が強い (伊藤, 1996)。しかし、援助行動には「思いやり行動」のようにコストが少ないものと、「骨髄提供」のようなコストの大きいものがある。中澤 (1993) は、援助行動の内的要因として共感性と援助に伴う損失 (援助コスト) に注目し、援助コストの小さい状況においてのみ共感能力は援助行動と関係があることを示している。援助コストの大きい状況では共感性は援助の動機づけとならず、共感性以外の要因が働いて援助行動が生じることを示唆している。骨髄移植を行うことは援助コストの大きいものであるため共感性の影響を受けない可能性がある。

### 援助行動と後悔

援助行動を促進する要因として、後悔に着目した研究もある。O'Carroll, Foster, McGeehan, and gord, & Ferguson (2011) は、生体ドナー未登録者に対し後悔を刺激として用いた文を提示した結果、生体臓器提供への参加意識が向上したことを明らかにしている。具体的には、自分の大切な誰かがなくなってしまう、その人は救うことが出来る人であったならば、きっと後悔するだろうといった刺激文を提示されたことによって、生体ドナー未登録者の臓器提供意識が高まった。しかしながら、このような生体臓器移植に状況を予期させる後悔操作は、我が国の実態とは乖離している。O'Carroll et al (2011) の研究で想定されている生体臓器提供は、日本移植学会倫理指針により原則的に親族のみに限定されている。臓器移植の方法としては脳死後の臓器提供もあるが、2010年に改正臓器移植法が全面施行され、生前本人が書面で臓器を提供する意思を表示している場合と、本人による臓器提供の意思は不明であるが家族の承諾がある場合においてのみ臓器提供は可能であ

る。仮に後悔予期場面として親族への生体臓器提供を想定することは、心理的な侵襲性が高くなる可能性が高く、身内だから助けたいといった関係性が親密であることの影響を強く受けることが考えられる。また、臓器移植の決定は家族の承諾によるもので、本人の意思決定ではない場合もあり、本人が死後の臓器提供の意思決定する際に、後悔を想起することは難しいことが推測される。そのため、本研究では、親族に限定されないドナー提供方法として骨髄を提示する。冒頭に示したとおり、骨髄移植は非親族間での提供も多く行われている。

高木（1982）によると、臓器・骨髄提供は、援助行動のうち他者にお金を寄付したり、時間と労働を提供して奉仕活動に携わったり、血液や臓器などを提供する「寄付・奉仕活動」類型に当たる。実際に骨髄提供を行うためにはいくつものハードルがあるが、登録を行うという行為自体はそのための第一段階であり、援助行動の一つとみなすことができる。そこで本研究では、骨髄バンクへの登録意思を援助行動の一つの指標として考える。

### 援助者と被援助者との関係性

骨髄バンクを介しての骨髄移植を受ける場合、提供者（ドナー）と被提供者がお互いの情報を知ることにはない。しかしながら、骨髄バンク登録の際、自分が将来援助するかもしれない相手を想像するかもしれない。その際、身内や親密な知人が骨髄移植を必要としている場面と、他人が骨髄移植を必要としている場面を想像するのでは、ドナー登録意識に違いがみられるのではないかと考える。石田・石田・神田（2005）は血縁者間骨髄移植を行う患者のドナーで、末梢血幹細胞採取を行った人および、骨髄採取を目的とした自己血採血を行った人にドナーとなるまでの気持ちの変化と骨髄提供を決定した過程を思い出してもらい、面接調査を行った。その結果、「ドナーになることの決定要因」と「ドナーになることの不安要因」という2つのカテゴリーが明らかになった。ドナーになることの決定要因には、「助けられるのは自分だけ」、「生きていてほしい」、「患者を気遣う」、「身内だから助けたい」、「ドナーとしての責任感」の5つのサブカテゴリーが挙げられた。そして「ドナーとしての責任感」の中には、「提供しないで死んだら悔やむ」という後悔の感情も含まれていると示している。非血縁者へ骨髄提供を行う際の意味決定について扱った研究はこれまで行われていないが、非血縁者間移植であっても同様の意思決定過程と同様の心理的規定因が生じうると考えられる。さらに、援助者と被援助者の親密度が高いほど援助行動が多く行われることが明らかになっており（西川・高木, 1989）、将来骨髄を提供する可能性がある他者を想像することは、骨髄ドナー登録の意思決定や態度変容に影響が生じると推測される。

以上の議論を踏まえて本研究は、共感性と骨髄提供想定相手との関係性が骨髄バンク登録意識に与える影響について、後悔を予期させる刺激を用いて探索的に検討を行う。

## 方法

### 1. 調査方法

Google ドライブのフォームを使用し、携帯電話、パソコン、スマートフォン、タブレットを用いて回答可能な Web 版の質問紙を作成した。

## 2. 質問紙構成

本研究は、説明文書を用いて調査の趣旨と回答方法を説明し、趣旨を理解した回答者が任意で調査票サイトにアクセスし回答する形式とした。オンライン上での質問紙の構成は以下の7つの部分で構成した (Figure1)。

### a. フェイスシート

回答者の基本属性として、年齢と性別について回答を求めた。

### b. 親密な友人の想起

O'Carroll et al (2011) の後悔操作では、「あなたがドナーにならなくて、あなたの大切な人が助けることができたのに亡くなったとしたらあなたは後悔するでしょう」と、「あなたの大切な人」という特定の人物のみを想起させている。しかし、特定の人物を想起した場合、実際にその人が病気になる可能性を考えることによる心理的負荷の影響を考慮し、現時点で親しい友人3人までを想起させることとした。具体的には、他人条件・友人条件で、「現在、あなたの親しい同性の友人を1～3名、思い浮かべ、その友人のイニシャルを記入してください。」と提示し、イニシャルの回答を求めた。

友人条件は想起された親密な友人が、

他人条件は想起された親密な友人の遠い親戚が「e. 後悔操作」で登場する人物となる。

### c. 骨髄ドナーの情報提示

全ての条件において、「以下の文章をじっくり読んでください。読み終わったら次のページへ行ってください。」という教示文を提示した。その後、骨髄移植推進財団により配布されているドナー登録のしおり『チャンス』より引用した文を提示した。内容は「日本で非血縁者間の骨髄移植や末梢血幹細胞移植を必要としている患者さんは、毎年少なくとも2,000人を数えます。一人でも多くの患者さんを救うには、一人でも多くのドナー登録が不可欠です。ドナー登録は、約2mLの採血で済みます。適合するドナーの方を待ち望む患者さんにとって、あなたの登録が、命をつなぐチャンスになるかもしれません」(日本骨髄バンク, 2015a) というものであった。

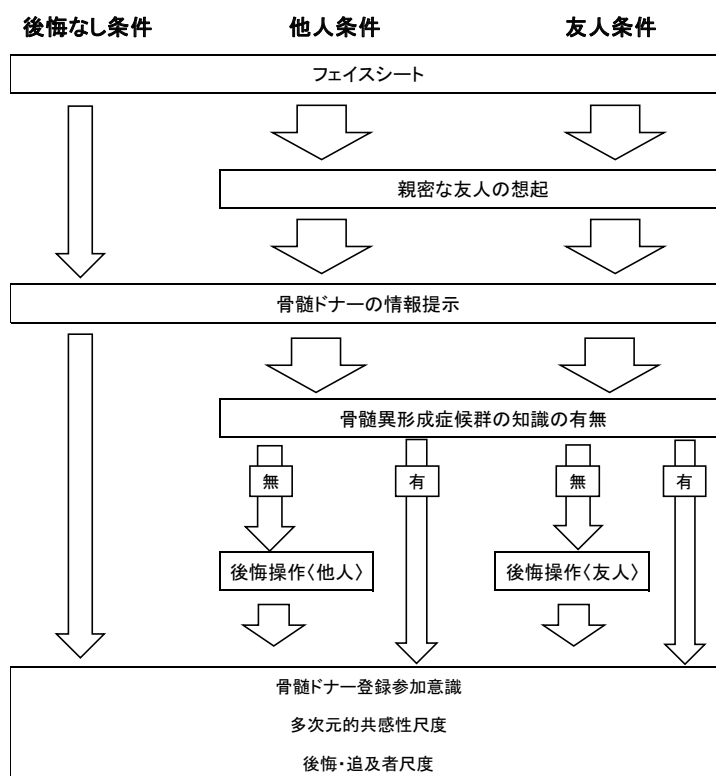


Figure1 質問紙構成



#### d. 骨髄異形成症候群の知識の有無

他人条件と友人条件にのみ、「e. 後悔操作」を行う。後悔操作では、骨髄異形成症候群に罹患する人物が登場する。そのため、他人条件と友人条件に振り分けられた参加者の知人や家族に、骨髄異形成症候群を患っている人がいた場合やそれによって亡くなった人がいた場合、参加者の心理的負荷が高く結果に影響が生じると考え、「骨髄異形成症候群」の知識の有無を尋ねる質問項目を設けた。後悔なし条件では、後悔操作を行わないため、この項目については省いた。知っていると答えた場合、「e. 後悔操作」を提示せず、「f. 骨髄バンクへの登録意識と関連する諸変数の測定」以降の回答を求めた。

#### e. 後悔操作

他人条件・友人条件には O'Carroll et al (2011) を参考にし、後悔を予期させる操作を行った。友人条件では、「b. 親密な友人の想起」で想起した友人の誰か、他人条件では、「b. 親密な友人の想起」で想起した友人の誰かの遠い親戚で、その友人ともほとんどあったことのない人が骨髄提供者を求めているという文を提示した。提示文は以下の通りである。友人条件と他人条件において、提示内容の異なる部分を下線部に示し、他人条件の場合に提示した言葉をカッコの中に表記する。

「5年後、あなたが最初に思い浮かべた友人の中の誰かが、(友人の誰かの遠い親戚で、その友人ともほとんどあったことのない人が)骨髄異形成症候群という病気にかかってしまい、重篤な生命な危機に陥ってしまいます。骨髄異形成症候群は、放置すると悪化して死亡する病気で、あなたの友人(その人)にとって、唯一の治療法が骨髄移植です。あなたの友人は(その人)、検査のたびに血液の数値が悪化し、両親への遺言も用意していました。もしかしたら、あなたは、友人(その人)を助けることができるかもしれません。しかし、たとえ友人(その人)のドナーになれたとしても、あなたがドナー登録をしていなければ、その友人(その人)の命を救うことのできる可能性はなくなってしまいます。骨髄異形成症候群で重篤な生命の危機に陥った友人(人)が、あなたが骨髄バンクに登録していることで助けることができる人だったら、あなたはきっと後悔し、ドナー登録しておけばよかったなと思うでしょう。」

#### f. 骨髄バンクへの登録意識と関連する諸変数の測定

骨髄バンクへの登録意識として、「(1) あなたは、将来、骨髄バンクに登録すると思いますか?」という項目に対して、5件法(確かにそう思う:5~全くそう思わない:1)で回答を求めた。加えて、関連する内容として、「(2) あなたは、将来骨髄ドナーになろうと思いますか?」「(3) あなたは、将来、脳死後において臓器提供すると思いますか?」「(4) あなたは、将来、積極的に献血に行こうと思いますか?」「(5) あなたは、将来、積極的に健康診断を受けようと思いますか?」「(6) あなたは、これから先、食事に関して気をつけようと思いますか?」「(7) あなたは、これから先、積極的に運動しようと思いますか?」の6項目にも5件法(確かにそう思う:5~全くそう思わない:1)で回答を求めた。

#### g. 個人特性の測定

多次元的共感性尺度(登張, 2003): 30項目で構成されており、5件法(非常にあてはまる:5~全くあてはまらない:1)で回答させた。この尺度は、他者の不運な感情体験に対し、自分も同じ

ような気持ちになり、他者の状況に対応した他者志向の温かい気持ちを持つ「共感的関心」、他者の苦痛に対して、不安や苦痛など、他者に向かわない自分中心の感情的反応をする「個人的苦痛」、小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する「ファンタジー」、他者の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」の4つの下位尺度からなり、妥当性・信頼性が確認されている。後悔・追求者尺度（磯部・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村，2008）：8項目5件法で回答を求めたが、本研究では分析の対象としておらず報告は割愛する。

### 3. 手続き

予め担当教員に承諾を得た後、大学での講義終了後に調査の趣旨説明を行い、Google ドライブのフォームへのアクセス URL を示した。また、講義以外の場でも個別に調査の趣旨説明を行い、Google ドライブのフォームへのアクセス URL を示した。回答への参加は任意であることと、回答受付期間中での質問への回答を依頼した。回答したくない項目については回答しないことも可能であり、回答中のいかなる時点であっても回答を中止することが出来ること、その際、いかなる個人の不利益も生じないことも伝えた。また注意点として、他の回答者と回答を見比べて行わない旨を伝えた。

大学生 195 名（男性 93 名，女性 102 名）が調査に参加した。なお、この数は調査サイトに回答を行い、最終的にデータの利用を承諾した人数である。

なお本研究は、広島国際大学医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。分析には清水・村山・大坊（2006）による HAD14\_504，HAD12\_405 を用いた。

## 結果

### 1. 分析対象者

調査回答者 195 名のうち、既に骨髄バンクにドナー登録をしていた 4 名、骨髄異形成症候群について知っているとした 12 名を除外し、179 名（男性 85 名，女性 84 名）を分析の対象とした。分析対象者の年齢層は 18 歳～31 歳であり、平均年齢は 20.21 歳（ $SD = 1.81$ ）であった。

### 2. 共感性尺度の因子分析および信頼性の検討，群分け

登張（2003）では、因子構造として「共感的関心」、「個人的苦痛」、「ファンタジー」、「気持ちの想像」の 4 因子が示されていた。本研究では、向社会的行動と相関が示されていない個人的苦痛を除く 24 項目を、スクリープロットによる固有値の減衰状況や解釈可能性から、1 因子構造が妥当であると判断し分析を行った。その後、先行研究と一致しない方向の負荷量を示す項目を削除

Table1 多次元共感性尺度因子分析と信頼性分析の結果

項目	I	共通性
困っている人がいたら助けたい	.74	.55
この人は不安なのだということ、人がどう感じているかに敏感なほうだ	.73	.53
人から無視されている人のことが心配になる	.68	.46
人が冷たくあしらわれているのを見ると、非常に腹が立つ	.67	.45
悲しい体験をした人の話を聞くと、つらくなってしまふ	.67	.45
落ち込んでいる人がいたら、勇気づけてあげたい	.64	.41
心配のあまりパニックに襲われている人を見ると何とかしてあげたくなる	.63	.40
本を読むときは、主人公の気持ちを考えながら読む	.62	.39
小説を読むとき、登場人物の気持ちになりきってまふ	.61	.38
友人の目からは物事がどう見えているのだろうと想像し、理解しようとする	.59	.35
誰かを批判するより前に、自分がその立場だったらどう思うか想像する	.56	.32
おもしろい物語や小説を読むと、そのようなことが自分に起こったらどのように感じるか想像する	.53	.28
友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる	.50	.25
他人をいじめている人がいると、腹が立つ	.43	.19
テレビや映画を見た後には、自分が登場人物の1人のように感じる	.42	.18
体の不自由な人やお年寄りに何かしてあげたいと思う	.38	.15
いじめられている人を見ると、胸が痛くなる	.38	.15
<b>固有値</b>	<b>5.86</b>	
<b>分散の説明率(%)</b>	<b>34.50</b>	

しながら主成分分析を繰り返す、最終的に 17 項目を 1 因子構造として扱うこととした (Table1)。なお、削除した項目は、「誰かに対し腹が立ったら、しばらくその人の立場に立ってみようとする」、「ドラマや映画を見るとき自分も登場人物になったような気持ちで見ることが多い」、「私は身近な人が悲しんでいても、何も感じないことがある」、「ニュースで災害にあった人などを見ると、同情してしまう」、「困っている人も見ても、それほどかわいそうと思わない」「テレビゲームの主人公になりきるのが好きだ」「怒っている人がいたら、どうして怒っているのだろうと想像する」の 7 項目である。内的整合性の確認のため  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .87$  を示し、十分な信頼性を得た。

### 3. 共感性と条件の群分け

算出した共感性得点を用いて、中央値 (3.70) を基準として高群・低群の二群に分けた。なお、Welch 検定の結果、共感性得点は高群と低群間に有意差が認められた ( $t(130) = 2.06, p < .05$ )。各条件の人数を Table2 に示す。

Table2 各条件の人数(単位:人)

	共感性		計
	低群	高群	
後悔なし条件	30	29	59
他人条件	25	34	59
友人条件	31	30	61
合計	86	93	179

### 4. 共感性と後悔操作が骨髄バンク登録意識に与える影響

骨髄ドナー登録意識を従属変数とし、後悔操作 (後悔なし・他人・友人)  $\times$  共感性 (高・低) の 2 要因分散分析を行った結果、後悔操作の主効果は有意でなかったものの ( $F(2,173) = 0.65, n.s$ )、共感性の主効果は有意であり ( $F(1,173) = 7.87, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .43$ )、共感性と後悔操作の交互作用に有意な効果が認められた ( $F(2,173) = 3.71, p < .05$ , 偏  $\eta^2 = .43$ )。交互作用の特徴を理解する



ために、各群の平均値を Figure2 に示した。

交互作用について単純主効果検定を行ったところ、他人条件においては、共感性低群よりも共感性高群の方が、骨髄バンク登録意識が高いことが示された ( $F(1,173) = 10.84, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .16$ )。友人条件においても、共感性低群よりも共感性高群の方が、骨髄バンク登録意識が高いことが示された ( $F(1,173) = 4.14, p < .05$ , 偏  $\eta^2 = .04$ )。しかし、

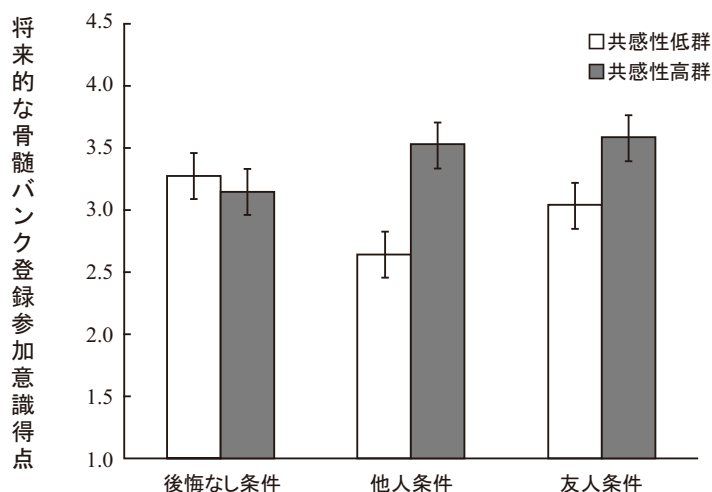


Figure2 共感性と後悔操作が将来的な骨髄バンク登録意識に与える影響

後悔なし条件においては、

共感性低群と共感性高群に有意な差は認められなかった ( $F(1,173) = 0.23, n.s$ )。共感性低群では、主効果が有意傾向を示した ( $F(2,173) = 2.57, p = .06$ , 偏  $\eta^2 = .07$ )。そこで Shaffer 法による多重比較検定を行ったところ、後悔なし条件－他人条件間においてのみ有意差が確認された ( $p = .03$ , Hedges's  $g = 0.82$ , 95%CI = [0.10, 1.55])。

加えて、骨髄バンク登録意思に関連が予想される項目について分散分析を行った結果を Table3 に示す。共感性の主効果は、いずれも共感性高群が低群より各内容について肯定的評価をしていた。また、健康診断に関する項目についての交互作用効果は、骨髄バンク登録意識に関する共感性×条件の交互作用効果の結果とほぼ同じパターンを示していた。

Table3 関連項目に関する分散分析の結果

項目内容		後悔なし条件		他人条件		友人条件		F値			
		平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	共感性	条件	交互作用	
(2)骨髄ドナー	共感性低群	3.00	0.18	2.72	0.20	2.74	0.18	1.69	0.01	1.55	
	共感性高群	2.83	0.18	3.15	0.17	3.07	0.18				
(3)臓器提供	共感性低群	3.30	0.22	3.36	0.25	3.19	0.22	0.44	0.71	0.60	
	共感性高群	3.14	0.23	3.62	0.21	3.47	0.22				
(4)献血	共感性低群	3.03	0.21	2.68	0.23	3.10	0.21	13.16	0.30	1.25	
	共感性高群	3.41	0.22	3.71	0.20	3.60	0.21				
(5)健康診断	共感性低群	3.90	0.17	3.16	0.19	3.55	0.17	19.95	**	1.47	3.50 *
	共感性高群	4.03	0.18	4.21	0.16	4.27	0.17				
(6)食事	共感性低群	3.67	0.17	3.28	0.19	3.68	0.17	23.81	**	1.35	0.53
	共感性高群	4.21	0.18	4.18	0.16	4.33	0.17				
(7)運動	共感性低群	3.60	0.17	3.36	0.19	3.58	0.17	21.78	**	1.18	0.03
	共感性高群	4.31	0.18	4.03	0.16	4.20	0.17				

Note: \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 考察

### 1. 骨髄バンク登録意識に影響を及ぼす要因の検討

Figure2の結果より、後悔なし条件では、共感性の高低による骨髄バンク登録意識に差は認められないが、後悔操作を行った条件（友人条件・他人条件）では、共感性の低さが骨髄バンク登録意識を低下させることが示された。高木（1998）は、援助授与の生起過程モデルの中で、潜在的援助者が他者の身の上になんらかの問題が生じていることに気づくことから、援助授与の生起は始まると述べている。本研究の後悔なし条件では、骨髄バンク登録に関する客観的な事実しか提示されていないため、他者の存在の想定が困難だったと考えられる。このことから考えると、他者の存在を明確に認識することによって、共感性は援助行動の規定因となると推測される。また、骨髄ドナーの情報提示は援助効果に関する広告的な内容になっており、後悔操作で用いた文章は、援助の必要性に関する広告的意味合いの強い内容のものであった。河村・楠見（2015）は、援助効果広告の提示は援助対象に対する顕在的評価へ影響を与えず、援助必要性広告の提示は援助対象への否定的な評価を示す方向へと変化したことを示している。また、苦痛の描写が曖昧な広告の場合、広告描写と対象を結び付けるかの判断に共感的関心といった個人差要因が影響する可能性があるとし唆している。本研究は、他人条件と友人条件に、骨髄異形成症候群という病名が刺激文の中で提示されているが、上記の条件の分析対象者は全員その病気について知識のない人とした。そのため、苦痛の描写について理解することが難しく、曖昧なものとしてとらえられていた可能性が考えられる。その結果、後悔操作を行った条件では、援助の必要性を明示した文章を提示され、否定的な評価を示すようになり、共感性の影響を受けたものであると考えられる。また、後悔なし条件では、援助対象に対する顕在的な評価への影響がなく、共感性の影響を受けないことが示唆された。

### 2. 共感性が低い人々の登録意識について

Figure2に示したが、共感性低群において他人条件と友人条件の間に骨髄バンクへの登録意識に有意な差は認められなかったが、後悔なし条件と比べて他人条件はドナー登録意識が低いことが示された。登張（2000）は、Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen（1983）の研究を踏まえ、苦境にある他者の情報に接して共感的関心反応を顕著に示す人は、援助せずに容易に逃避できる条件と逃避しにくい条件のいずれにおいても援助することが多いことを示している。そのため共感性高群においては、骨髄バンク登録参加意識に差が見られなかったと考える。しかし、Trope & Liberman（2010）による解釈レベル理論（Construal-Level Theory）では、心理的距離が遠くなれば遠くなるほど、抽象的なものとして捉えやすく、時間的に遠いものに関しては価値的側面が意識されやすく、楽観的な対処のみを考えやすいことが示されている。友人条件は対象他者との心理的距離が相対的に近く具体的なものとして捉えられやすい。一方他人条件は対象他者との心理的距離が相対的に遠く、抽象的なものとして捉えられやすい。加えて本研究において想定した5年後は、時間的距離も遠く、価値的判断がされやすいと考えられる。従って他人条件に関しては、これらの双方の影響を受けて、抽象的に捉えて判断している可能性が高いと考えられる。共感性の低い人々は他人条件において、自分がドナー登録しなくてもきっと大丈夫だろうという楽観的な対処をしてい

た可能性がある。その結果、ドナー登録意識が後悔なし条件と比べて下がる方向性が示唆されたと考えられる。

### 3. 本研究の問題点と今後の展望

本研究では、多次元共感性尺度を負荷量や共通性、解釈可能性を考慮して1因子構造として用いた。よって、共感性を多次元的に捉えることができなかった。今後の研究では、共感性の多次元的側面、特に援助行動との関連が示されている共感的関心の側面に注目し検討する必要があると考える。加えて、本研究の参加者は医療系大学を標榜する大学の学生に限られている。彼らは一般的にその教育環境から医療に関わる事柄への関心が概ね高いと考えられるため、今回の結果の一般化は慎重であるべきである。さらに本研究では、将来的な骨髄バンク登録意識を調査しており、実際の行動に変化が現れるのか、行動レベルの指標を用いて縦断的な調査も行う必要がある。そうすることによって、個人の共感性と後悔予期の対象者との関係性が、援助行動としての骨髄バンク登録に及ぼす影響を詳細に検討することが可能となるだろう。

また、ドナー登録意識と同時に関連するいくつかの内容について条件×共感性の分散分析を行ったところ、健康診断の受診意図について、条件×共感性の交互作用効果が示され、ドナー登録意識と同様の結果が示された。このことは、ドナー登録という援助行動を行う上での前提となる自身の健康状態の確認行動という側面においても、共感性と骨髄提供想定相手との関係性が影響を及ぼすことを示唆するものである。今後、健康関連情報とドナー登録促進情報の対呈示を行うことによる説得効果の検証も必要である。このような社会心理学的手法を用いることによって、自身の健康診断行動のような利己的行動から、ドナー登録のような利他的行動への影響過程の検証も可能になると考えられる。

### 引用文献

- Batson, C.D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 706-718.
- Davis, M.H.(1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark Publishers.  
(デイヴィス, M.H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感性の社会心理学 —人間関係の基礎— 川島書店).
- 石田順子・石田和子・神田清子 (2005). 骨髄移植ドナーとなるための意思決定に関する研究 群馬保健学紀要, **26**, 43-50.
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008). 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究, **79** (5), 453-458.
- 伊藤秀章 (1996). 援助行動の質—援助の質の高さと関連する性格特性とジェンダー— 実験社会心理学研究, **36** (2), 261-272.
- 河村悠太・楠見考 (2015). 募金広告の描写が援助対象への顕在的・潜在的評価及び寄付行動に与える影響. 心理学研究, **86** (1), 21-31.

- 中澤清 (1993). 向社会的行動における共感能力と援助コストの関連に関する研究 人文論究, **43** (2), 98-109
- 日本骨髄バンク (2015a). Chance [〈http://www.jmdp.or.jp/reg/chance/flash/index.html〉](http://www.jmdp.or.jp/reg/chance/flash/index.html) (2015年12月18日閲覧).
- 日本骨髄バンク (2015b). 骨髄バンクデータ集-骨髄バンク事業の現状(ドナー登録者・移植例数等) [〈http://www.jmdp.or.jp/data/01.html〉](http://www.jmdp.or.jp/data/01.html) (2015年12月18日閲覧)
- 西川正行・高木修 (1989). 援助要請の原因帰属と親密性が援助行動に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **28** (2), 105-113.
- O'Carroll R.E., Foster, C., McGeehan, G., Sandgord, k., & Ferguson, E. (2011). The "Ick" factor, anticipated regret, and willingness to become an organ donor. *Health Psychology*, **30** (2), 236-245.
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, **106** (146), 1-6.
- 鈴木隆子 (1992). 高社会的行動に影響する諸要因 —共感性・社会的スキル・外向性— 実験社会心理学研究, **32** (1), 71-84.
- 高木 修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, **23**, 135-156
- 高木 修 (1998). セレクション社会心理学—7人を助ける心—援助行動の社会心理学—サイエンス社
- 登張真稲 (2000). 多角的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9** (1), 36-51.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多角的視点による検討 発達心理学研究, **14** (2), 136-148.
- Trope, Y. & Liberman N.(2010). Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review*, **117** (2), 440-463.
- VandenBos, G. R.(Eds.) (2007). APA Dictionary of Psychology. Washington: American Psychological Association. (ファンデンボス G. R. (監修) (2013). APA 心理学大辞典 繁杵算男・四本裕子(監訳) 培風館.